

ブラジルにおけるドイツ・オランダ系移民の生存戦略と民族性 ——パラナ州カストロ市の事例——

イントロダクション ——研究課題と研究対象地域——

丸 山 浩 明

皆さんこんにちは。立教大学文学部の丸山浩明です。本日は「ブラジルにおけるドイツ・オランダ系移民の生存戦略と民族性—パラナ州カストロ市の事例—」と題しましてお話しいたします。本日、第1部の講演をお願いしている専修大学文学部の山本充先生は、ドイツ・オーストリアを中心とするヨーロッパ研究がご専門で、現在はオーストリアのチロル地方で、都市からの人口移動にともなう農村の質的变化について研究されています。プライベートではありますが、山本先生は私の大学・大学院時代の同級生であり、研究分野も指導教員も同じという、とても近い関係にあります。先生は大学院生の時に、フンボルト財団の奨学生としてドイツのハイデルベルク大学に2年間留学されており、今回のブラジルでのドイツ人移民調査も、ドイツ語を駆使して聞き取り調査をなされました。本日第1部の講演を楽しみにしております。

さて私たちは、19世紀以降、550万人を超える外国人移民を受け入れて形成されてきた多民族国家であるブラジルの中でも、とりわけ多様な民族構成を示し「エスニック・ラボラトリー（民族実験室）」の異称をもつ、ブラジル南部のパラナ州に位置するカストロ市をおもな研究対象地域に選定して（図1）、各国移民集団の生活世界に見られる民族性や移民相互の関係性、間・国家的特性（トランスナショナリティ）について、実証的な比較研究を進めております¹。

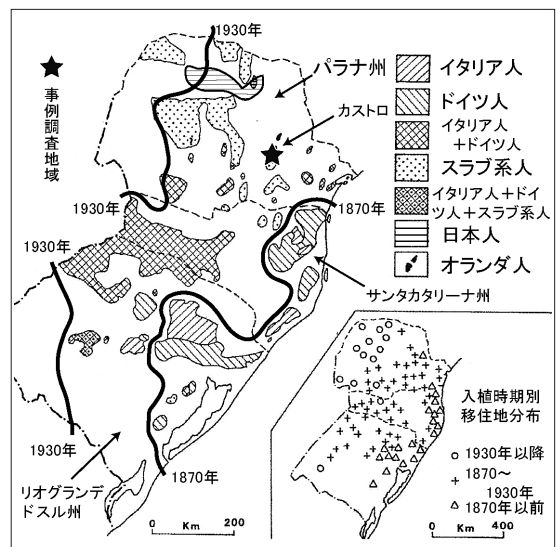


図1 ブラジル南部における各国移民集団の入植地分布とパラナ州カストロ市の位置

（Dickenson 1983 に筆者が加筆改変）

カストロ市には、ドイツ人やオランダ人のほかに、イタリア人、ポーランド人、日本人など、さまざまな移民集団が生活しておりますが、本日は現地調査の中間報告ということで、まずは本地域でとくに重要かつ特徴的な生活世界を具現化しているドイツ人とオランダ人の移民集団を取り上げ、それぞれの移植民の歴史、言語や民族文化の継承、経済・社会的特徴などについてお話ししたいと思います（図2）。

さてカストロ市ですが、パラナ州の州都クリチバ市の西方約160kmに位置します。ブラジルでは、18世紀にミナスジェライスで続々と金鉱が発見され、「金の経済サイクル」を迎えました。その結果、国の内外から金鉱を求めてたくさんの人々がここに集結し、人口が急増して巨大な消費市場が形成されました。ミナスジェライスには、各地から馬やラバでさまざまな物資が供給され、採掘された金鉱はリオデジャネイロから海外へと輸出されました。

当時、ブラジルの南部には良質な牧場が広がり、牛馬の大産地になっていました。「金の経済サイクル」の到来は、この地に物資運搬用のラバの生産ブームを引き起こしました。そして、リオグランデドスル州のヴィアマンから、ラバ市場がたったサンパウロのソコカバに向かう隊商が、1724年から本地域に鉄道が普及する20世紀を迎えるまでの間、ブラジルの南部を頻繁に行き交いました。

カストロ市は、このようなラバの隊商（トロペイロス）の主要な停泊地として発展しました（図3）。すなわち、カストロ市の市街地北部をヤボー川（トゥピ・グアラニー語で「川が溢れる」「洪水」を意味する）が東西に流れているため、隊商は川の水位が低いときに浅瀬を選んで横断しなければなりません。

そのため、川を横断する条件が整うまで、隊商は河畔に停泊してラバを休ませねばならず、ここに町が形成され発展することになりました。

1771年にサンタナ・ド・ヤボー教区となったカストロは、1789年には教会を中心にヴィラ・ノーヴァ・デ・カストロと呼ばれる小さな町に発展しました（図4）。



図2 カストロ市における各国移住地・移民集団の分布

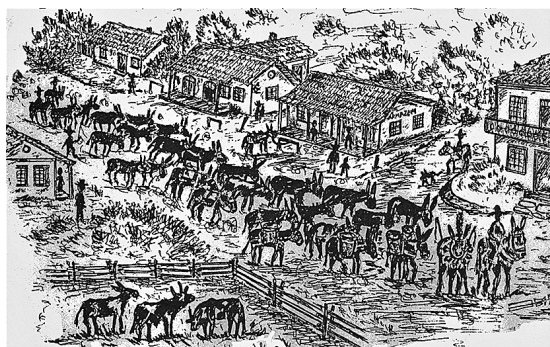


図3 ラバの隊商（トロペイロス）の主要な停泊地として発展したカストロの町

（出典：Diniz, J. M. F. and Villela, L. M. C. 2007 表紙）

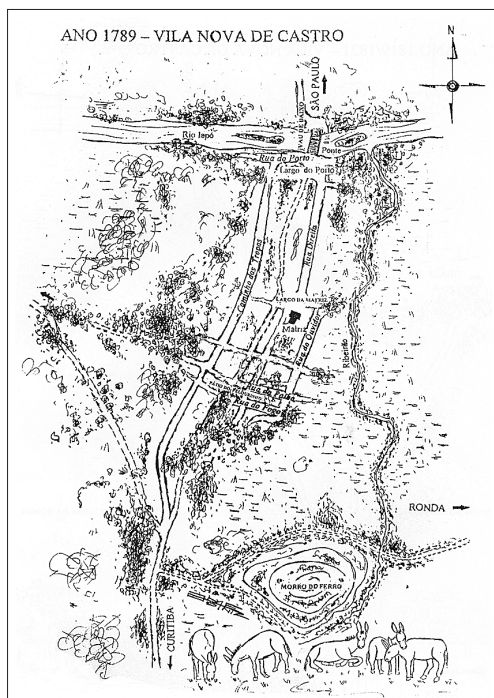


図4 1789年のヴィラ・ノーヴァ・デ・カストロ
(出典：Diniz, J. M. F. and Villela, L. M. C. 2007: 11)

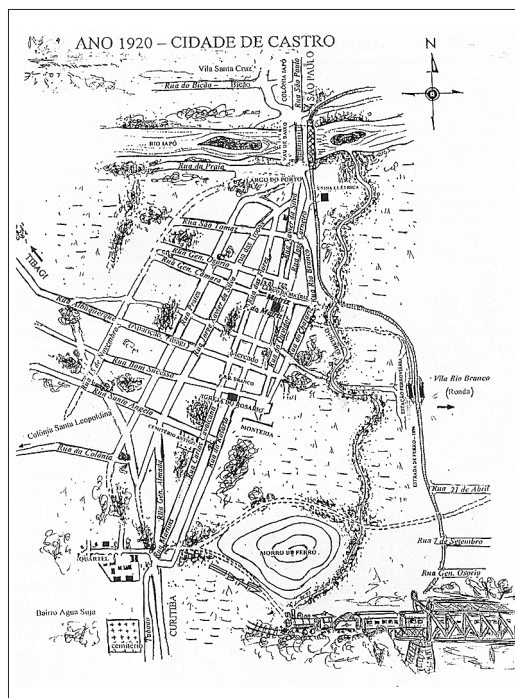


図5 1920年のカストロ市
(出典：Diniz, J. M. F. and Villela, L. M. C. 2007: 15)

当時、ここはサンパウロ県の一部でしたが、1853年にはサンパウロ県から分離独立したパラナ県の一部となり、1857年にはカストロ市に昇格しました。そして、1885年以降20世紀初めにかけて、多数のヨーロッパ移民が流入して移住地がいくつも創設されました。

1920年には、すでに鉄道が通り、カストロ市の市街地は大きく拡大しています(図5)。カストロ市にやってきたヨーロッパ移民は、民族的に多様なルーツをもっていました。19世紀後半から20世紀にかけてとくに多かったのが、当時のオーストリア・ハンガリー帝国領からやってきたポーランド・ウクライナ人や、ロシア人、リトアニア人などで、スラブ系移民の集団移住が顕著な特徴でした。そこにドイツ人、オーストリア人、デンマーク人、スイス人、イタリア人、オランダ人なども加わって、本地域の経済・社会的発展に多大な影響を及ぼしてきました。

カストロ市の古い入植地は、1885年頃にポーランド人や民族ドイツ人のスワビア人(シュヴァーベン人)などが植民したサンタ・クララ移住地やサンタ・レオポルディーナ移住地、1913年に連邦政府が創設したヤポー移住地、そしてイタリア人が植民したコンセイソン移住地などで、カストロ市の西方に広がる森林や草原地帯に入植しました。また、第二次世界大戦前にはドイツ人移住地のテラノーヴァやポーランド人移住地のマラカナン、戦後にはオランダ人移住地のカストロランダが、カストロ市の南部や西部に創設されました。さらにコチア青年を中心とする日本人も、カストロ市の市街地とその近郊に入植しました(図2参照)。

このように、パラナ州を代表する都市であるカストロ市には、19世紀後半からさまざまな民族が、さまざまな理由、さまざまな方法により移住し、すでに130年を超える歴史の中で、それぞ

れの民族性を発揮しつつも相互に深い関係性を保ちながら生活してきました。そのため、各国移民集団の相互関係に着目しながら、ブラジル社会におけるそれぞれの特徴を解明するためには好適な事例調査地域といえます。

それでは最初に、ドイツ人移民が第二次世界大戦前にカストロ市に創設したテラノーヴァ移住地について、山本先生にご紹介をお願いしたいと思います。そして後半は、オランダ人移民が同市内に戦後に創設したカストロランダ移住地について、私がお話したいと思います。それでは、よろしくお願いします。

〈註〉

- 1 「ブラジルにおける各国移民の非同化適応戦略とトランスナショナリティに関する比較研究」
(基盤研究B、代表：丸山浩明、2018～2022年度)

〈参考文献〉

Dickenson, J. P. 1983. *Brazil (World's Landscapes)*, Boston: Addison-Wesley Longman.

Diniz, J. M. F. and Villela, L. M. C. 2007. *Ruas de Castro no tempo dos tropeiros (Série museu do tropeiro Nº 1)*, Castro-PR.

(まるやま ひろあき 本学文学部教授)